て居ります　大守「此の方に於ても悔むべき奴とは言ひ條、敢て此の方に於て、何う云ふ刑に處すると指圖すべき者にあらず、熊之助、平四郎に取つては、一方は兄の仇、一方は師匠、無念に存するは尤もである、斯れは両名の望みに任せ、桃川段十郎を海岸へ引き出し、汝等の中より両名ばかり檢使に立ち、且つは奴の卑怯未練な奴であるから、風を吃つて逃げるやうなことがある事は不都合ぢや、家中の腕の出來さうな者を選んで、其の遺つて遺れえ　重役「且つ又深尾源十郎儀十分に心を付けて仇討をさせて遣れえ　重役「且つ又深尾源十郎儀は如何計らひませう　大守「夫れは父玄蕃は予が手討に致した玄蕃は老職の身分ある奴、惜むべき奴なれば手討に致したのである が、源十郎は詰り無祿の部屋住の者、敢て予が彼れ是れ指圖をするには及ばぬ、汝等評議の上宜きに計へい　重役「左様でございます、夫れが宜からう」、我々共評定の上にて然るべく處置方を致しませう　大守「アれば、是に於て源十郎は詰腹と云ふことに相成りました、是れは誠に情ない切腹でございます、武士に取つては大の恥なんです、併し無祿の源十郎、お手討にならぬのは未だしもでございます、死骸は上の手で以てお取り棄てに相成りました、會に此方は桃川段十郎、獄屋に繋がれて居ても氣が氣ちやございませぬ　段十「アー情ない、漸う今日まで事を左右に扞げて辛を忍び免れて參つたが、最早や獄屋の者となり、我が一命も近きに迫つて參つた、　相手は熊之助、平四郎奴の両人、雲に跨がる術あつても逃れることは迚も出きまい、思へば〳〵是非もなきことなり」と獨り口惜んでいませぬ、是に於て唯仇討の日を相待つて居りましたが、愈々其の年も暮れ翌年の春と相成つて參りました、新玉の正月を迎へ、十五日間をば濟ましてから呼び出しになりました　重役「如何に桃川段十郎、面を上げえ」と仰せられました　段十「ハッ」と答へて段十郎顔を上げて見ると、江戸家老の山田六郎殿でござい

ます　六郎「汝屢々江戸表に在つて、極悪人深尾玄蕃に吩咐けられ大それた若殿歌之助君を、一度ならず二度三度、種々の手段を相構へ、一命を絶たんとなせしのみか、剰さへ手を換へ品を換へ白刃の汰沙に及ばんとしたであらう、ム、、天網恢々でか免るべき、一度江戸表を逃げ出し、彼方此方に身を潜むると云へど思ひも寄らざる出羽の大館に於て、現在己れを仇と狙ひ居る武内熊之助の手に捕はれ、此の南部へ送られしは悪運の尽きぬる所である、汝の如きは重き仕置に行ふべき奴なれど、武内熊之助、石原等の願ひに依つて、當處の海邊に場所を設け、両名の者に仇討を爲せるから、最早や未練の振舞ひなく、尋常に勝負を致せ、相分つたか　段十「是非に及びませぬことでございます、六郎「ム、、併し只今のうちに何か遺言が是れあるならば申し置け、何も無いか　段十「別段に何事も心残りはございませぬ　六郎「ム、有るまい、人を殺めて跡を晦まし、今日まで遁げ走りするやうな卑怯な汝、言ひ遺すことのあらう道理はない、然らば宜いな、明日だぞ　段十「心得ましてございます」　そこで石原、武内へも沙汰を致して其の用意をお爲せになりました、誰れ言ふとなく此の事が御城下の噂となり「一犬虚を吠ゆれば萬犬實を傳ふる」の譬、追々噂が高くなつて來ました、最う既に夜のうちから、我れも〳〵と海岸の方へ見に來ると云ふやうな有様、さても當日熊之助と平四郎は、別段に無紋の裝束などゝ云ふことではございませぬ、武内熊之助は長途の旅で別段に衣裝などは持つて居りません、依つて南部兵庫殿より武内へ向けて新たに衣裝を調へて下されました、本人は他くまでも辭退を申す、なれど豊夫か、六部や虚無僧の姿でも出られませぬから、春のこともございまするし、淺黄紬の小袖に絹小倉の袴、大小刀は素より鍔を扱いて所持して居ります、之れを立派に道具を着けて元々通りになして手挟み、絹布を畳んで襷、頭巾、平四郎も

同じく淺黄紬の、大いなる紋付いたる衣類に、是れも小倉の袴布の襷に布の頭巾、大小刀立派に横たへて、両人ながら草鞋穿きで以て現場に出頭し、豫て用意の席に扣へて、時刻の來るを相待ちます、山田六郎、南部圖書の御同所は當日檢使の役として御出張、竹矢來より人矢來、徒士足輕五十名ばかりの者が、各々六尺棒を持つて周圍を取り卷いて居ります、其の外側には數万の見物が集つて居りますが、何れも仇討の當人を見るまでは何とも言ふ者でございません、暫らくの間は水を撒いた如くになつて居ましたが、早や未刻と思しき刻限に相成ると、ドーンドーンと片傍に吊りある太鼓を鳴らし出しました、すると前日に設けられました左右の假小屋、左は平四郎、熊之助、右は桃川段十郎、双方共にお湯漬と云ふ物を下し置かれます、是は情ないのです、熊之助と平四郎へは割箸でお膳が出ます、尤も菜は梅干と生味噌とを付け、夫れに燒鹽の小いのが添へて



あります、漬物は一切香の物が付いて居ります段十郎の方も同じくお湯漬が出ます、生味噌に鹽、梅干等は異りませぬが、香の物は三切付いて居ります、三切付けると喜繁が悪いと能く申しますのは是れでございます、討たれる者は身を斬られるから三切、討つ者は人を斬るから一切、討つ者と討たれる者とはお湯漬の菜からして異ひます、やがてお湯漬を頂いて了ふと夫れへズッと役人が両名お出ではなり役人「桃川段十郎　段十「ハッ」と顔を上げまするとと役人「其方事、加賀國江沼郡大聖寺に於て、武内熊太郎なる者を欺き、重役の姓名を相騙りて本人を誘ひ出し、飛道具を以て之れを斃ち、早怯にも其のまゝ逐電いたして踪跡を晦まし、今日までの間諸々方々に隠れ居たる所、天網恢々でか免れん、現在其の熊太郎の舎弟熊之助なる者に捕へられ、斯く南部へ向けて護送に相成りし段、是れ悪運の盡きぬる所、當南部の藩士石原平四郎なる者の爲には熊太郎は現在師に相當

るが故に、旁々以て願ひに依り、當海岸に於て仇を報はせることである、卑怯の振舞之れなきやう、尋常の勝負に及べ、刻限來りなば速かに支度に及べ　段十「委細承知を仕りましてござります」　折柄ドーン、ドーンと太鼓が鳴りまするとと、段十郎は漸う起つて廣場の中央へ出でました、能く世間で「彼奴死ぬかい影がない」と言ひますが、人間も撮う殺されると云ふ時になると勢ひがございませぬ、其の姿を見ると見物は「ワアー、出たア」と聲を揚げて、暫しは鳴りも鎮まりませぬ　役人「靜かに致せ、神妙にせい」と制しまするけれども中々肯きません、知るも知らぬもワイ〳〵と囃し立てます、兎角するうちに平四郎、熊之助も左の小屋から現はれ、チャンと其の處に列びまするとと、土器に水を入れ供饌の上に載せて掛りの者が持つて出ます、能く之れを三方の上に載せると云ふことを言ひますが、今日仇を報いたり何かするに、目出度い席や貴人の前へ持ち出す三方を用ゐる道理はござりませぬ、切腹の時でも同じこと、彼れは供饌ゞ申します、三方は三方に穴のあるもの、供饌は四方に穴の無いものでございます、やがて三人は其の土器を取つて、半分は飲んで半分は大地へ明ける「討つ者も討たるゝ者も土器の碎けて後は土となるらめ」と云ふ古歌も實に道理や、其のまゝ土器は大地へ投げ碎き、供饌は足で踏み碎く、是れが禮ださうでございます、そこで名乘を掛ける熊之「如何は桃川段十郎、汝加賀國江沼郡大聖寺に於て我が兄武内熊太郎を卑怯にも暗殺となし遂に國許を退去き、其の連累たる大道寺喜十郎、岡野兵内の兩名は、石原平四郎の手を以て既に討ち取つたり、然るに汝巧みに踪跡を晦まし、今日まで存命へて居りしが、天網恢恢疎にして漏らさず、今日此の場の仕儀と相成つた、卒ざ尋常に勝負を致せ　段十「エ、イ是非に及ばぬ、去らば」とあつて、双方起ち立つて引き別れるや否、腰なる一刀をばスラリと拔きました、尤

も段十郎の腰の物は一旦は上へお取上げになつたが、其の場に臨んで之れをお與へになりました、さて双方扳いた時には、敷萬の見物は鯨波の聲「ヤーァ扳いた〳〵、始つたぞ」ヤンヤワンワと八釜しく申します、双方共に出る息引く息アウンの呼吸、最初の間は熊之助が段十郎に立ち向ひました、中々何うして、桃川段十郎は死物狂て、武内熊之助は兄の仇と云ふので、双方共に油斷なく戰うて居ります、やゝ十五六合も斬り結んだかと思ふうち熊之「エヽイ」と一聲聲が掛つたかと思ふと、忽ち桃川の右の手首を斬り落しました見物「斬られたァ」と言ふ、段十郎はタヂ〳〵タヂと後方へ退つて、卑怯にも左の手にて小刀を扳いて、何だ向はんと致します時に、早くも平四郎が飛び出して入れ代つた、イヤハヤ何うも此の仁は、正直一遍な代りに非癖の強い仁、中々熊之助のやうに穩かに戰つては居りません平四「汝れッ」と言ふので滅しく斬り込み、後れ後れて段々退る奴を



平四「エヽイ」と言ふ聲諸共に、平四郎が飛び込んだかと思ふと右の肩より左の脇壺へグサと斬り下げました、見事なものでございます、段十郎は血煙立つて屏風倒しに打倒れました平四「卒ざ熊之助殿」と聲を掛けると熊之「オヽ」と答へて飛んで參り、直ぐに咽元に鎗を當てがひ熊之「天命思ひ知つたか段十郎、兄の仇ッ」と言ひながら、甚かに絶息を刺しました熊之「ソレ石原、平四「心得ました」と、同じく平四郎も絶息を刺す、之れを双方相絶息と申します、首尾よく仇を報いまして、血刀の殷血を拭ひ鞘に納め、両家老に向つて一禮を致しますると家老「天晴〳〵夫れにて事足りたり熊之「死骸の儀は如何仕りませう家老「其の儀は當方に於て取計らふ、汝等は一先づ町宿へ退り、三日を經て大守へお目通りを致し御禮を申すが宜からう」と仰せ渡されました、そこで両人は町宿へ退り、桃川の死骸は南部家に於てお

取乘てになつて了ひました、さて両人は三日を過ぎて不浄を拂ひ、大守のお目通りへ出でゝ御禮を申し上げまする」と利雄公は殊の外の御機嫌にて利雄「天晴れなる汝等両名の働き、予も満足に存する」と仰しやつて、お盃を下し置かれました利雄「如何に熊之助とやら、其方相當なる所の祿を相與へるが、南部に仕官を致す心は無きや」と仰せられました熊之「有難き大守の思召し、身に取りまして、如何ばかりか大慶に存じまするが、實は手前事は加賀國江沼郡……」と、大聖寺の大守の思召しを辞べ前田家に仕官の志を述べまする、夫れでは云ふので、武内を大聖寺へお送りになりました、依つて熊之助は高祿を戴いて前田家に御奉公を致し一生を安樂に送りました、さて又石原平四郎は、お家の爲に數度の大功を現はし、師匠の仇を報いたるは天晴れある者とあつて、一千石を下し置かれ、重役の一人にお加へになりました、依つて其の身の妻たる南部兵庫殿の息女お八重殿を引き取り、其の後は何事もなく、立派に暮して主君へ忠義を盡すことになりました、右に就て叔母のお辰從弟の芳太郎も、平四郎の扶助を受けて安樂に世を送りました、また彼の深尾玄蕃の娘お繁の方の胎内よりお出ましにありました繁之助殿は、別に此のお方に何うはずいませんが、祖父なり伯父なりの悪事に依つて、痛ましや若隠居と云ふことになりました、尚ほ彼の南部太郎殿は、自ら乞うて黒髪を剃り落し、出家得道を致され、曉堂院と申されまして。鉢倉山八幡宮の別當となり、此のお方は八十九歳まで御長命になりました、其の後若殿歌之助君は無事にお家を御相續遊ばし、南部大膳大夫利倍公と御名乗り遊ばされまして、茲にお家は萬々歳と治まりましたるは、實に目出度き限りでございます、エヽ長々と辯じ續けましたる聚傑石原平四郎、武内熊之助のお物語りも、茲に目出度く瀧尾落着と相成りました、茲に謹みて讀者諸君の御最負

御高覽の榮を感謝いたします。

復讐美談

# 武内熊之助

大尾

竹内熊之助奥附

講演者　石川一口

發行者　大阪市東區安土町四丁目三十八番屋敷　石田忠兵衛

印刷者　大阪市西區立賣堀南通弐丁目二二五番地　蒲田德次郎

明治四十一年六月一日印刷
明治四十一年六月五日發行

不許複製

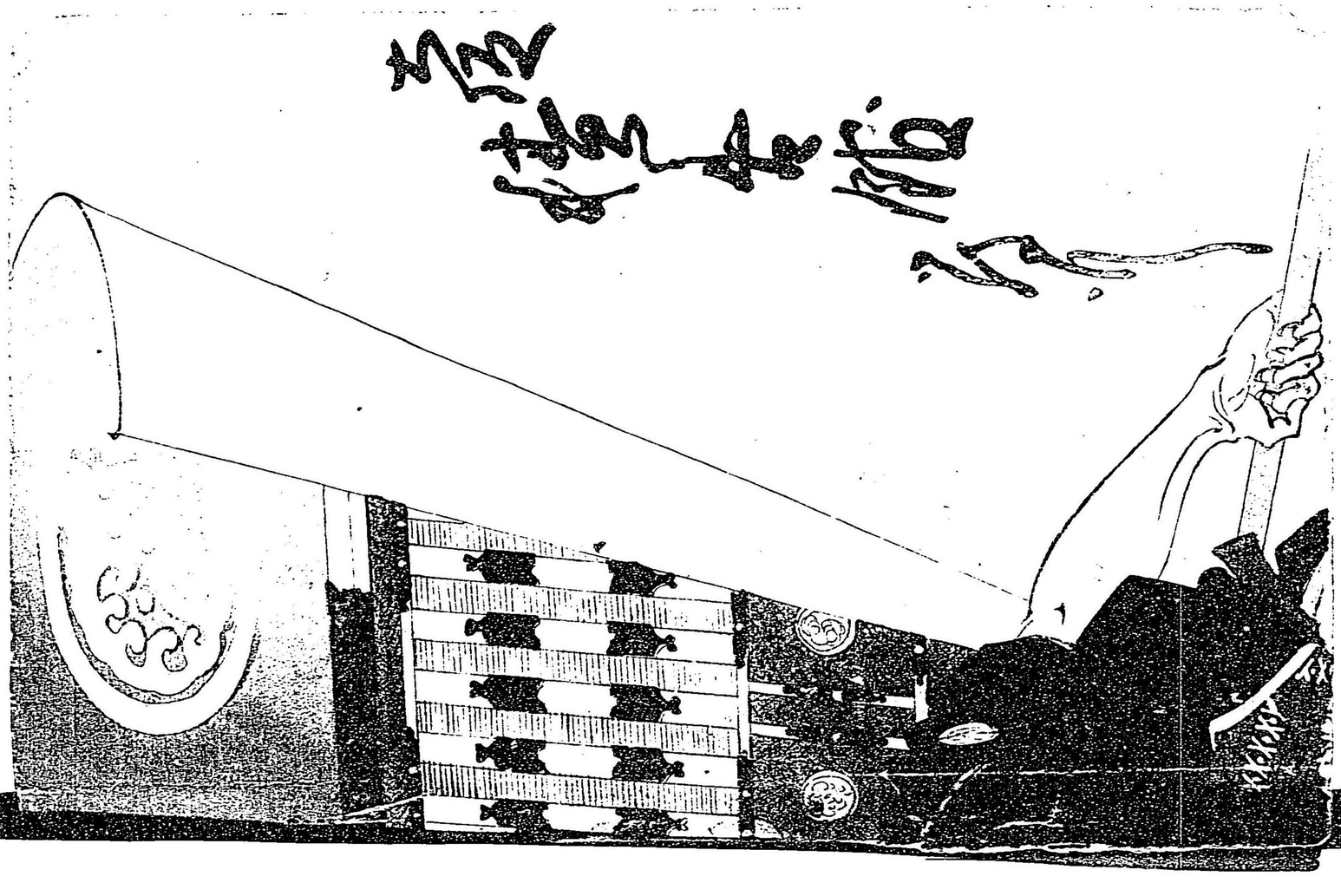
發賣所

大阪市東區安土町四丁目

積善館本店

（電話西東一一三〇番）
（振替貯金二〇六六番）

257.
429



特
54

097315−000−6

特9−544

武内熊之助（復讐美談）

石川　一口／講演

M41

DBS−1182